

共同研究を終えて

研究副代表者 廣田 律子

共同研究「アジア祭祀芸能の比較研究」グループは、日本・中国・台湾・韓国の民俗学・文化人類学・歴史学・宗教学・音楽の専門分野の異なる研究者が集結し、日本・中国・韓国において全員でフィールドワークを行ない、多面的で豊富な内容をもつアジアの祭祀芸能に関する比較研究を行なう、学際的国際的さらに独創的な活動を目指した。

初年度（2009年）として神奈川大学日本常民文化研究所の資料の確認およびアチックフィルム収録対象である奥三河中在家の花祭りの現状を把握し、渋沢敬三が現地で行なった活動の跡を調査することから始めた。さらに比較材料を増やす目的で、COE「“人類文化研究のための非文字資料の体系化” 2班“身体技法および感性の資料化と体系化”」で身体表現にかかわるデータの蓄積があり、花祭りの中でも伝承者の年齢層が厚い古戸の花祭りの調査を行なった。

2年目は中国福建省南部に位置する演劇伝承の中心地と言える泉州において調査を実施した。民間色の強い高甲戯と逆に上流階級によって育てられた梨園戯、高甲戯と梨園戯に取り入れられた南音、さらに泉州を拠点として世界的にも有名な人形劇の木偶劇（糸操りおよびパペット）も調査した。

演劇を育んだ歴史ある商業都市泉州の現状、特に演劇に強く影響を与えている宗教施設の開元寺・天后廟・東岳廟等を見学し、演劇の背景の理解に努めた。

3年目は旧正月に韓国全羅北道嵎島で大里堂祭および鎮里堂祭の調査を実施し、韓国の送船儀礼の実際を知ることができた。3月には湖南省藍山県の瑶族が伝承する送船儀礼調査を実施し、さらに比較の事例を増やすことができた。

1～3年目はフィールドワークの前後に研究会を開催し、メンバーによる研究発表およびフィールドワークの内容を踏まえた討論を行なったが「アジア祭祀芸能の比較研究」グループはアジアの祭祀芸能の総合的な比較研究の基盤を築くことを目指しており、3年目は12月11日に公開研究会「海の民俗伝承と祭祀儀礼—船による神の来往と身体表現—」を開催した。4年目の9月にメンバーが神奈川大学に再度集い、成果の中間報告会「海を越えての交流—民俗、祭祀、芸能の面から—」を実施した。

この間一番印象に残っているのは、公開研究会「海の民俗伝承と祭祀儀礼—船による神の来往と身体表現—」である。計画段階から実施に至るまで全般にわたるコーディネイトを行ない、韓国の巫女のパフォーマンスおよび研究発表および総合討論を通じて多く学ばせていただいた。書面を割いてあらためて詳しく報告したい。

この公開研究会では、午前最初に田耕旭先生のご紹介で来日できなかった、重要無形文化財を含めたクツの技能保有者である韓国の巫女集団により、龍王祭・刀上舞・神将舞の上演が行なわれた。クツ祭祀および芸能身体表現の実態を体感する機会となったが、上演に際しては祭壇をしつらえ、神と交感する場を本格的に舞台上に再現できた。これが可能となったのは巫女の方々がこの日のために特別にご準備くださり、持参くださった種々な道具があったからにはほかならない。仏教・道教および民間の信仰対象である神々の像が描かれた色鮮やかな祭壇正面に掲げる絵画をはじめとして、特別な供物、法術に必要な法具、五色の衣装等々である。

巫女の方々は来日後すぐに日本の土地神にあいさつするため富士山に向かわれ、山麓で祭儀を執り行ない、この地でクツを実施する許可を得たのだが、このことから神事として上演が行なわれ

たことが分かる。実際の上演の間、舞台とフロアは一体となり、神を迎え、神事を行ない、神に願いを伝え、神の回答を得、神を送るという一連の信仰祭祀の場を体感することとなった。

興奮が冷めないうちに午後は、李京燁「韓国西海岸における送船の種類とその意味化の過程」、姜昭全「済州島巫俗のヨンガムノリと船送り」、謝聰輝「南台湾和瘟送船儀式の実際情況とその身体技法・パフォーマンスの意味」、吉野晃「タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の船送り」の発表とそれぞれの発表について野村伸一、金良淑、丸山宏、鈴木正崇がコメントを発表し、さらに金容儀、皆川厚一、廣田律子も加わり「アジアの身体表現の比較研究をめぐって」をテーマに総合討論を行なった。あらためてアジアの祭祀芸能の比較研究の重要性を再確認することとなった。祭祀儀礼が行なわれ、儀礼知識が伝承されるには、ベースになる神観念や靈魂観そして祖先観等が存在する。今回のプロジェクトを通して何回も研究者が顔を合わせ意見を交換することで、少なくとも日本・中国・台湾・韓国においては祭祀儀礼のベースを共通に理解することができ、比較研究を進める条件が整っていることは確認した。その上でそれぞれのテーマで研究成果を上げることができ、祭祀芸能研究の活性化につながる新しい方向を提示することができたと考える。

今回のプロジェクトにおける社会への貢献で一番と言えるのは、日中台韓の研究者が共同でフィールドワークを実施することで、それぞれの角度からの研究を行ない、お互いの知見を突き合わせ、研究を高め合うことで、深い意思疎通が実現できたことではないだろうか。昨今の日中韓の政府同士は、関係がかなりぎくしゃくしており、隣人の正常な付き合いができていないと言いがたい。そんな中祭祀芸能という伝統文化をテーマに三国がお互いの価値観を認め合い、研究を一步も二歩も進めることができた体験は、さらに将来に引き継がれることで、関係の回復を願う民間の活動とも結び付き、芽を出し成長し美しい花を咲かせることにつながると確信している。